

尊敬表現としての『て』『に』

鎌 田 良 二一

(一)

風間力三氏の『『てある』のいひ方』に動作の状態化表出ということについて述べておられるので、ここに少しながら引用する。

私は「犬が歩いてゐる」といふ表現を継続態であるとするよりどこを継続といふ点よりむしろ状態といふ点におきたい。歩行といふ動作はこの場合継続した状態として話手に把握されてゐると考へる。話手は犬の動作を、その動作が行はれてゐる状態にあると把握してこれを一の状態の表現として表出したのである。歩行といふ動作を、話手が動作として意識するよりもこれを一の状態として意識しこれを表出したとみたい。従つて継続態の本質は動作作用の状態化表出といふにある。この状態化表出といふ機能が『に』にあるとみたい。「犬が歩き続ける」においては動作が動作として把握表出されてゐるにすぎない。ただその動作が継続的に行はれてゐるといふだけであつて、継続した動作の敘述がなされてゐるのである。歩き続けるが一の動作の敘述であることは歩くが一の動作の敘述であるのと同じである。もしそれが単に一の動作として把握されるだけでなく一の状態として把握されるに至れば、それは

犬が歩き続けている

と表出されることになる。そしてその時はじめてそれが継続態と呼ばれるのである。

以上動作を動作としてとらへる敘述と動作を状態としてとらへる敘述とを區別したが、或る動作をどちらのし方で表出するかは話手の統覚のし方できまる。沈みつつある舟に対して第三者が

ア、舟が沈んでゐる

と継続態で表現する場合でも、その舟に乗つて危殆に瀕してゐる当事者にとっては

ア、舟が沈む

と表出せざるを得ない。いはば沈むといふ現象を話手が一の状態と意識する余裕がないともいへようか。一概にはいへないが、状態と

して意識するのは現象と話手の間に何らか距離余裕がある場合だともみられよう。同様に

犬が吠えてゐる

は犬の動作が一の狀態としてとらへられてゐる普通の**状景描写**であるが、

犬が吠える、子供が泣く、イヤモウ大変な騒ぎ

となると動作が動作として表現され描写に活気が出てくるわけである。(国語と国文学 三三卷 三号)

この状態表出は「現象と話手の間に何らか距離余裕がある場合」というので、これは、とにかく自分の現在の動作でなく他人の動作である。自分は第三者の立場に立ってそれをみているということになる。

特別の場合を除いて、自分以外のすべての人に尊敬語を用いるという考えからでも、ここに他人の動作を言ういい方が状態化表出であり、それがそのまま尊敬のいい方になるということが考えられる。

即ち、為手尊敬をする場合に「ている」という状態化表出を用いるということである。

今泉忠義博士の「日本の敬語」(講座日本語Ⅱ)にも「ている」について述べておられるが、その中に

「いらっしゃっています」は「いらっしゃいます」だけでいいはずですが、こんないい方が流行する……

ということを言っておられるが、「て」のあるのと、ないのとで、これを私は今の状態化表出と結びつけて考えてみたい。

(二)

神戸方言に「ヨル」と「トル」とがある。「今、読んでいる最中だ」の継続態に

本 読みヨル

本 読んドル

同じに使われる。「ヨル」は連用形に、「トル」は音便形に連なる。「ヨル」はくずれて「ヨー」に、「トル」はくずれて「トー」になるのだが、

「雪が降っている」は、今、空から落ちて来ている時、即ち「降る」という動作の最中の時は「ヨル」「トル」両方で、「積っている」だけのときは「トル」

完了態の「もう、その本なら一ト月前に読んでいる」は「ヨル」でなく「トル」だけである。そして「まさに死なんとしている時」(将然)「あつ、金魚がアブアブして死にヨでえ」となり「ヨル」を使う。「あつ、危い、落ちヨ」今、まさに落ちかけようとしている。まだ落ちるという動作ははじまっていない。

ヨルは 将然 継続(最中、習慣的継続) 反復

トルは 継続(最中、習慣的継続) 反復 存在 完了

で、「ヨル」は動作をより動的に、「トル」は動作をより靜的に表現している。即ち、先の動作的表出は「ヨル」、状態的表出は「トル」ということになる。

だから「あつ、舟が沈みヨ、えらいこっちゃ、それ逃げえ」

といつて逃げ出すのであつて、自分が舟に乗っているのだから、

「あつ、舟が沈んどー」

ではもうおそい。

状態化して言うときは「あつ、あんなとこに舟が沈んどー」ということになる。

「犬が吠えヨ」は動的、「犬が吠えト」は状態的になる。

そこで「ヨル」「トル」は一体、何物か、ということだが、「トル」は「ておる」であり、「ヨル」は連用形に「おる」のついたもの、「起きおる」「書きおる」だろう。はじめイ段につづて *Kakioru* > *Kakioru* > *Kakijoru* で、この途中の形は「書つきよる」「行つきよる」のように促拗音になって使われている。こうして「ヨル」が確立してから他のエ段にでも何にでもついて「受けヨル」「枯れヨル」も出来たものと思う。

すると一方は「——おる」、他方は「——ておる。」そして「——おる」の方が動作的表出、即ち、現象と話手との距離余裕のないものと、「——ておる」の状態的表出、即ち、距離余裕のあるもの。

ここで、先の「あつ、舟が沈みヨ」と、「あつ、舟が沈んどー」で、「て」があるか、ないかの違いで、自分の舟の場合と、「沈む」という動作を距離余裕をもっているというか第三者の立場に立っているというか、そんな状態との差が出来るのである。

そこで、同じ神戸方言、あるいは関西一般にある為手尊敬の「テヤ」の「テ」について考えるに、
字を書いとつてや
字を書きよつてです

「や」「です」は聞手に対する語で問題なく、この「テ」があることによつて為手尊敬になるということは「ている」の場合と同じく、状態化表出が自分の動作でなくその動作の為手が第三者であるということを知らせるといふ場合、先の、自分以外のすべての人を尊敬するということや、為手（相手）を自分と同列でなく一段と上におき、自分からはそれをながめるといふ尊敬表現のかたちからでもとけると思う。

(三)

為手尊敬は（お——になる）という形で代表される。

この「お」は接頭語でわかりきっているが、「に」もやはり、今の、状態化表出と思える。
為手（相手）が「——（という状態）になる」である。

しかし、これも先の「いらっしゃいます」と「いらっしゃっています」との違いのように「に」のないものとしては、平家物語に見える。「お——ある」「お——なる」の形がある。これについては、ここで例文を出す必要もないと思うが、山田孝雄博士の「平家物語の語法」にも

「ナル」はその事のおのづから生るの義なるが、上に尊貴の人の行為なることをあらはす名詞を伴ふ時に相保合して、ここに一種の敬語をなすに至るものとす。

夜中ニ主上腰輿召テ法住寺殿へ行幸ナル

上皇マヌカルマシキ事ヲ見テ其死ヲ見ニタヘスシテ泣々都へ還御ナル

長寛二年八月廿六日志度ノ道場ト申山寺ニシテ崩御ナリニケリ
などをあげておられる。

そして、「お——なる」の間に助詞、又は修飾語等の語をはさむことについても書かれているが、今泉忠義博士の「国語發達史大要」にも

「お……になる」が著しく發達したのは江戸末期からであるが、その萌芽は既にこの期に見える。

胸打騒テ居タル処ニ御ヒルニ成ケレバ、例ノ先朝政ニモ及給ワス夜ノヲトトラ出テモアヘサセ給ハス（延慶本平家、三本）

としておられる。

これらのことから考えても「お——なる」から、それを、より状态的にするために「お——になる」となったと同じように、「いらっしゃいます」が「いらっしゃっています」となり、敬語の中に「ている」という状態化表出がさかんに用いられるようになったのであるといえる。

又、この「に」は

先生には御元氣ですか

の「に」も尊敬である。（遠藤嘉基校閲 久山善正編 対照国文法表）

同じように

××先生にはこの度

などが尊敬になるのも同じく状態化表出ととる。

以上、要するに尊敬表現というものは一種の状態化表出である。そしてそれには「ている」の「て」「になる」の「に」が用いられている。

その一つとして関西方言の「テヤ」もあり、これは状態化表出することによって尊敬の意をあらわしているということをお願いしたい。